

第256回 今月読んだ本

福本和夫 思想の再解釈

ー「福本イズム」から「日本ルネッサンス史論」へ（9）

第5章 初期三部作を読むー「福本イズム」の誕生

先述のとおり、福本の初期三部作は『社会の構成並に变革の過程』（白揚社、1926年2月）、『無産階級の方向転換』（希望閣、同年4月、北条一雄名義）、『経済学批判の方法論』（白揚社、同年6月）である。およそ半年の間に、それまで日本では論じられたことのない新しいマルクス主義の方法論、運動論、組織論などを立て続けに発表した福本は、一躍、左翼思想界のトップランナーとなった。

初期三部作の位置づけは『社会の構成並に变革の過程』が变革（革命）への道筋を示した本論、『無産階級の方向転換』がそのための組織論・運動論、『経済学批判の方法論』が社会の基底（下部構造）を動かすマルクス主義経済学の概説である。本章では初期三部作のエッセンスを抽出し、マルクス主義に関する詳しい知識を前提にしない形で可能な限りわかりやすく論じてみたい。

1 マルクス主義の新しい教科書

ー『社会の構成並に变革の過程』（1926年）

社会主義運動史、労働運動史の研究者である伊藤晃は、高畠素之（1886－1928、国家社会主義者、『資本論』を初めて完訳）、山川均、荒畑寒村、福本和夫らを論じた労作『天皇制と社会主義』（勁草書房、1988年）において、なぜ福本思想が画期的であったのか、について次のように論じた。

プロレタリアートの歴史的使命について、日本で最初に正当な問題提起をしたのは福本和夫であった。

それまで、山川均のように、資本主義の社会主義への必然的発展を述べ、この発展の表現として労働運動を説明する理論があった。また、河上肇のように、「全社会の利益をその中心の標準」として、人道主義的立場からプロレタリアートにのぞむ思想もあった。それらはともに、人類の理想にかんする福音をプロレタリアートに伝え、彼らがそれにめざめることを期待していたのである。1920年代前半のマルクス主義におけるこの性格は、福本思想を全く新しいものと感じさせた理由である。（『天皇制と社会主義』勁草書房、1988年、195頁）

何が新しかったのか。「持たざる階級」（無産者階級＝プロレタリアート）が自分たちの利益を限界まで追求していくことによって、「持てる階級」（有産者階級＝ブルジョアジー）の存立を否定するだけでなく、階級間の対立を乗り越え資本主義から新しいフェーズ（社会主義、共産主義）へと進化させることができる。福本思想の登場以降では何の変哲もないマルクス主義理解ではあるが、福本以前には社会の構成を分析して変革の過程を素描する試みは存在しなかった。

福本は、プロレタリアートの歴史的使命、「階級利益なるもの一般を揚棄すること」を、マルクスの、特に初期の発言にもとづいて、この階級の社会的歴史的特性、「有産者社会の下にあって、その存在の内的必然により、否定せられてゐる階級であり、而してこの否定をまた、必然に拒否、否定すべく余儀なくされている」ところに由来せしめた。

ブルジョアジーとプロレタリアートとを「一の全体の二つの方面として証明するのでは足りない」、「一の全体」としての資本主義での自己の地位を知ること、プロレタリアートはその全体を揚棄するものだ、それは同時に彼らの状態のうちに集中されている「今日のあらゆる非人間的な生活条件を揚棄すること」でもある。こう述べたとき福本は、河上肇の立脚点を正確につき、これを打ち砕いたのである。「無産者階級の立脚地は……決して直接には社会全体の利益を主張するものではない」、しかしこの階級的利益の実現は、階級的利益なるもの一般の揚棄なしにありえないのだから、「無産者階級が、自己の階級利益を徹底的に主張することは同時に全階級利益を揚棄することとなるのであります。」（前掲195－196頁、なお括弧は『社会の構成並に変革の過程』からの伊東による引用）

『社会の構成並に変革の過程』の序文は格調高い。若き福本の意気込みが感じられる。

序文

1. 哲学者は世界を色々と解説したにすぎなかった。だが、肝要な問題は、世界を変革することである。（マルクス「フォイエルバッハに関するテーゼ」第11テーゼ、1945年－岩田注）
2. 我無産者階級は、今や方向転換期にある。かくて、彼らは、今やまず、その組織過程の全野を凝視しなければなら

ぬ。したがってまた、さらに進んでは、社会の構成並に変革の全過程を見きわめなければならぬ。

「労働者大衆の意識は、もし彼らにして、唯物論者の分析並に基準を、社会的階級、範疇、集団の活動並に生活のすべての形態に適用することを理解することなくんば、真実の階級意識たりぬ。」

「革命的理論なくしては、いかなる革命的闘争もありえない。」

3 (省略、本書は京都帝国大学学友会での講演ノートに基づいていることが記されている—岩田注) (前掲43—44頁)

山川均のような経済史観、河上のような人道主義では人間疎外を乗り越えることはできない。社会の変革のためには「大きな地図」(社会「全体」の構成図)が必要である。さらに変革には経済闘争のみならず意識闘争が大前提になる。

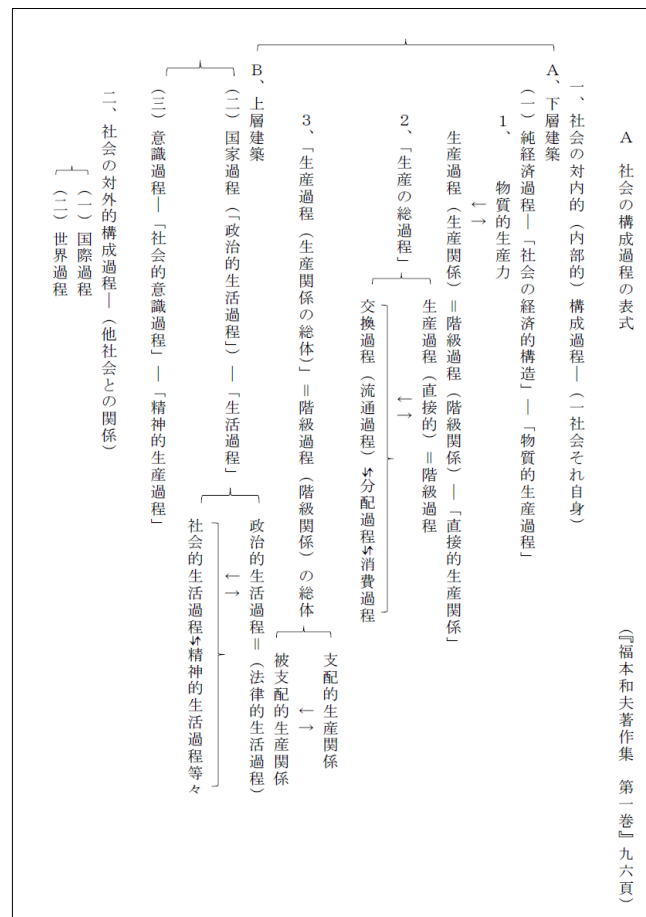
福本の代表作『社会の構成並に変革の過程』は理論の書、マルクス主義の新しい教科書である。マルクスの原典を読み解いた福本が変革への大まかな道筋を提示したもので、細かな実践論は論じられていない。180頁ほどの小著が目次にあるとおり12章に分かれている。難解な書と言われるが、各論点が要領よくまとめられている。初めて本書に接した1920年代の若者たちは、今まで目にしたことのない単語が並ぶ文章に驚愕し、何が論じられているか全く理解できなかったに違いない。

内容目次

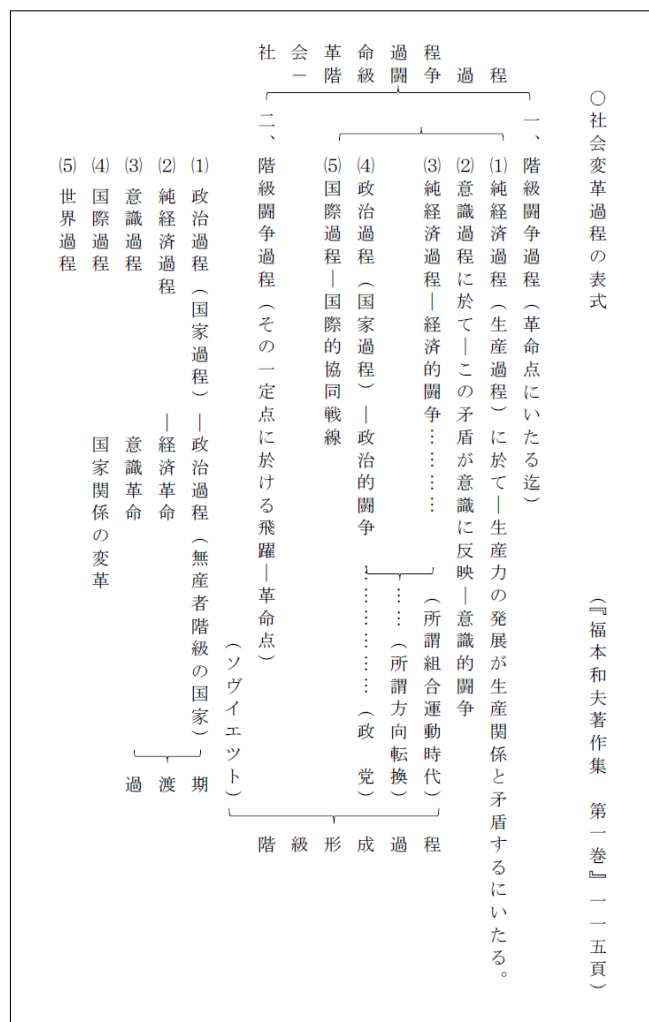
- 1 序論—闘争の発展とこの問題の要求
- 2 この問題が唯物弁証法に把握せらるるをうるにいたりし根拠—条件
- 3 対象と端初
- 4 概観
- 5 純経済過程—物質的生産過程
 - (1) 商品生産過程の分析
 - (2) 労働過程
 - (3) 生産過程—直接的生産過程
 - (4) 「生産の総過程」
 - (5) 「生産関係の総和」
 - (6) 階級過程
- 6 国家過程(政治過程)
 - (1) 序説
 - (2) 政治的生活過程—国家過程
 - (3) 家族的生活過程
 - (4) 教育的生活過程
 - (5) 宗教的生活過程
- 7 意識過程
 - (1) 生産過程と精神的生産過程
 - (2) 資本家的商品過程と意識過程
 - (3) 弁証法的唯物論

- 8 国際過程
 - 9 世界過程
 - 10 諸過程間の関係
 - 11 要約—社会形象の表式
 - (1) 社会の構成過程表式 (2) ブハーリン並にコルシュの社会構成表式の批判 (3) 河上博士の唯物史観公式図解の批判 (4) 高田博士の第三史観の方式の批判 (5) ケネーの三大過程表式の批判
 - 12 社会の変革過程
 - (1) 再生産過程 (2) 生産力の発展—生産力と生産関係の矛盾 (3) 階級対立—革命的階級の発展 (4) 変革行為 (5) 階級闘争過程 (6) 社会の変革過程表式
- (前掲45—47頁)

本書には20の図が掲載され、本文をわかりやすく補っている。すべてを引用することはできないので、最も重要な2つの図、すなわち「社会の構成過程の表式」と「社会変革過程の表式」(後者は『福本和夫初期著作集 第1巻』復刻自註版、こぶし書房、1971年には掲載されていない。検閲で削除されたのか)を提示しよう。この2図は本書のエッセンスであり、丹念に読み込むと福本が何を語りたかったか理解できる。



これほどまでに緻密な理論分析を行わなければ変革（革命）に着手できないとすれば、いつになったら行動に移せるのかと深い諦念を抱く者が出てきても不思議ではない。



さて、ここからはいくつかの論点に関して補足したい。

『社会の構成並に変革の過程』がルカーチの『歴史と階級意識』に影響を受けていることは疑い得ない。下記は「いかにもルカーチ流」といった表現であるとともに、福本の弁証法理解が凝縮している部分でもある。

そして、無産者階級のかかる社会的、歴史的特性から、其の社会認識の特性が生じるのであります。

かくして無産者階級は、

第一に一事物を媒介性（Vermittlung）に於て観察しうべく、また、しないではいられない。

第二に一事物を其の生成（Werden）に於て。

第三に一全体性 (Totalität) に於て観察しうべく、また、しないではいられない。故にこの階級にとっては、其の自己認識は同時に全社会の客観的認識たりうるし、またたらねばならぬ。

第四は一かかる認識に対して、この階級は、認識の主体たると同時に客体たりうべく、また、たらずにはいられない。かの観念論的弁証法論者ヘーゲルによって企てられたる主客統一 (思考と存在、理論と実行の統一) の試みは、この階級一無産者階級一の出現によって、はじめて完成せられうることとなってきたのであります。

「社会の構成＝並に变革の過程」が唯物弁証法的に考察するにいたった一されざるをえなくなった根拠一条件。かかる考察の歴史的意義の根底は、実にここに存するものと私はおもうのであります。

(前掲67－68頁)

「媒介性」「生成」「全体性」とあわせて「下向法」「上向法」の導入・紹介もまた福本の功績の一つである。(ちなみに拙著『橋田邦彦・アーレント・現象学—生活世界における公共性と倫理』『宇沢弘文「社会を治す」—社会的共通資本の再解釈』の方法論はそれぞれ「上向法」と「下向法」である。)

マルクスは『経済学批判序説』(『経済学批判』原著1859年、岩波文庫、1956年)第3節「経済学の方法」で「第一の道では、完全な表象が発散されて抽象的な規定となり、第二の道では、抽象的な諸規定が思考の道をへて具体的なものの再生産にみちびかれる。」(前掲313頁)と方法論を提示する。第一の道が下向法、第二の道が上向法である。『資本論』は抽象的な「商品」から「上向」する道を辿る。

でありますから、私達は先ず、一旦、我々の対象たる有産者社会の階級の生活過程をば、「最初の且、最も単純なる範疇」たる商品生産過程にまで分析—「下向」したる後ち、そこから再び、有産者階級の生活過程まで総合—「上向」—マルクスの所謂「後方への旅」(『経済学批判』XXXV)は始められ、つづけらるべきであります。

かくして、一かかる手続を経まして—私達は、そこに、所謂媒介性に於ける有産者社会の生活過程—所謂具体的な—「それは多くの規定の結集であり従って多様性の統一たるが故に具体的である」(『経済学批判』XXXVI)ところの—有産者社会の生活過程—其の全内的聯絡、全内的発展を厳密に跡づけられたる一の

統一的な社会形像―「単純化された見とおしのつく」一つの社会構成＝並に変革過程の形像―を獲得しうるのであります。

かかる考察の手続の把握―これは、かのブハーリンの『史的唯物論の理論』に欠如している点ではないかと私はおもっているのであります。（前掲『福本和夫初期著作集 第1巻』71－72頁）

革命家・理論家であるブハーリン（1888－1938）はロシア革命後に党機関誌『プラウダ』編集長となり、その後、『史的唯物論―マルクス主義社会学の一般的教科書』（1921年、青木書店、1974年）でレーニンに激賞される。コミンテルンでは執行委員会議長を務め「27テーゼ」で福本イズムを全面的に否定した。それがきっかけになり福本は歴史の表舞台から消え去ることになる（後述）。やがてスターリンとの権力闘争に敗れて粛清された。

『社会の構成並に変革の過程』におけるブハーリンへの言及は数ヶ所しかなく、参考文献として『史的唯物論』（福本は『史的唯物論の理論』と書く）の書名を引用しているほかには「厳密な弁証法的展開が欠如していはいまいか」（前掲51頁）と指摘するに過ぎない。

これだけ見ると、福本はブハーリン思想を意識していないかのようである。しかし、そうではなかった。復刻自註版（1971年）の「はじめに」でこう述べる。

『社会の構成並に変革の過程』とこれらに直接関連の諸論文において、私が全面的・根本的に批判してその誤りを徹底的に正したいと思ったのは、河上博士の唯物史観に次いでブハーリンの唯物史観であった。

これは、当時ある事情から遠慮を余儀なくされ、ブハーリンの不十分な階級の取扱い方についてのみ不満を披瀝するにとどめられればならなかったが、私は多くの点で、根本的に首肯しえないものがあって、書くことはさしひかえたが、一応周辺の同志に口頭では、特に触れてもらすので、私が、ブハーリンの唯物史観に大いに異議あるものであることは、いわば半ば公然の秘密であった。（前掲10頁）

福本が「根本的に首肯しえないもの」とは何であったのか。

第1にブハーリンの「均衡説」である。『史的唯物論』では「社会と自然のあいだの均衡」（第V章）、「社会の諸要素間の均衡」（第VI章）、「社会的均衡の破壊と再生」（第VII章）と詳しく論じる。

これらのすべての例（生物界、「無機」界、社会で見られるさまざまな例—岩田注）から、問題の要点はまったく同一の事柄、すなわち均衡ということなのだ……。闘争は均衡の破壊なのである。……結局、自然と社会において観察される均衡とは、絶対的な均衡、不動の均衡ではなくて、可動的な均衡なのである。……均衡が確立されるとすぐに破壊され、またふたたび新しい基礎のうえに確立されて、そしてふたたび破壊されていく……。

（前掲『史的唯物論』第三章「弁証法的唯物論」 82頁）

これは弁証法とは似て非なるものである。「弁証法をブランコの如き、または、時計の振り子の如き運動と曲解せしめる危険性を、多量に持つものではないか……。」（前掲『社会の構成並に変革の過程』11頁）

第2は、ブハーリンの弁証法、すなわち諸過程間の関係がきわめて機械論的であることである。第Ⅱ章「決定論と非決定論」の議論は弁証法抜き機械論的唯物論の域にとどまっている。

第3に、初めて階級闘争を論じたのが最終（第ⅤⅢ）章「階級と階級闘争」で分量的にも全体の10分の1に過ぎないことである。したがって「政治的生活過程—国家過程」の取扱いが、またあまりにも、ぞんざいで不十分にすぎない」（前掲11頁）ことも理論的脆弱性の一端であった。

福本は、1927年にモスクワのコミンテルンに召喚されてブハーリンと対面したときのことを回想する。

ブハーリン司会のある小委員会で、最初、かれは、かれの著作の多くが日本に翻訳されていることをきき、満願の微笑をたたえて、ニコニコしていたが、日本の一委員（河合悦三（1903—1966、農民運動家—岩田注））が、おせっかいにも、余計な口をきいて、「しかし、同志福本だけは、同志ブハーリンの唯物史観に異論を述べています。」と暴露に及ぶや、かれはたちまち不機嫌になってしまった。そして、それ以来、私に対するかれの態度は、俄然一変してしまった。ブハーリンは感情家だなとつくづく私はおもわされた。漢文の古語に、逆鱗（げきりん）に触れる、というのは、まさにかくの如きをいうのであろう、と当時を想起するごとに、私は今もひそかに微苦笑を禁じえないのである。

（前掲12頁）

文中の「同志福本」は正確には偽名の「同志クロキ」である。福本はブハーリンの逆鱗に触れたことを懐かしく回想してはいる

が、当時、コミンテルン議長に逆らうことは即座に生命の危険に直面する事態であった。

ブハーリンはスターリンと政治的に組んでトロツキー（1879－1940、亡命先のメキシコで暗殺）を失脚させる。次にスターリンはブハーリンの追い落としを図る。攻撃材料の一つが理論の誤りであった。ブハーリン思想における弁証法の欠如、均衡論への傾斜は、折衷主義、右翼的誤謬と批判されるようになり、理論的否定は政治的否定につながっていくのである。後の福本の失脚劇は、ブハーリン粛清のミニチュア版と言ってよかろう。